

# グループ紹介

## いばらき おもちゃ病院



新聞で、東京を中心に「おもちゃ病院」が開院されている記事を見て、私も修理してあげたい思いにかられました。茨木市社会福祉協議会の職員に相談したところ、富田林市のおもちゃ病院を紹介され見学に行きました。もともと手先が器用だった私は、茨木市で開院する気持ちを担当者に伝え、アドバイスを受けて帰りました。ボランティアセンターの職員が、個人で登録している人に声をかけてくれたり、チラシを作って呼びかけてくれたりしたこともあって、平成15年（2003年）に私たちのグループが誕生しました。

最初は「修理ドクター」が見つからず苦勞の連続でしたが、職員の応援もあって何とかクリア。しかし今度は開院場所で苦勞。ちょうどこの頃、「茨木交流倶楽部」に出入りしていた関係で、場所の提供をお願いしたところ、気持ちよく貸してくださいました。

登録4カ月後の11月に、やっと第1回「いばらきおもちゃ病院」を開院することができましたが、来院者はゼロでガックリ。しかし「患者」はしだいに増えていき、平成17年（2005年）12月で26回目を数えました。修理件数も200件を超え、完治率は90%以上です。完治率が高くなった要因は、IC（集積回路）に詳しい人が「ドクター」として名乗りを挙げ、「治療」に加わったからです。完治が難しい「患者」については入院していただき、持ち帰り修理して、翌月の開院日に退院します。現在、ICドクター2人、外科ドクター8人、裁縫ドクター1人、事務長1人が活動中です。修理が必要なおもちゃがあれば、ぜひ来院してください。

開院日 毎月第4土曜日（12月のみ第3土曜日）  
福祉文化会館1階 10:00～12:00  
茨木交流倶楽部内 13:00～15:00

連絡先 須磨 邦男 627-0086  
（茨木市社会福祉協議会 ボランティアセンター内）

## 音訳ボランティア グループ藍野



私たちのグループは、茨木市立図書館が視覚障害者サービスを始めようと募集した講習会をきっかけに発足しました。その時の受講生は18人。昭和50年（1975年）4月のことでした。翌年、グループの名称を、三島地方の古称である「藍野」に、“愛”や“EYE”などの意味をこめて「グループ藍野」と決めました。当初は手探り状態だったこの会も、今年で30周年。現在は29人で活動しています。

中央図書館地下にある録音室および作業室が、私たちの主な活動場所です。活動内容は、対面朗読やテープ雑誌、テープ図書の作成およびデジタル化。また市の広報『いばらき』のテープ録音もしています。

私たちの役目は、視覚障害者の目の代わりになるということ。内容がより正しく伝わるように、ときには同音異義語や図、写真などに説明を加えることが必要です。ですから朗読、音訳技術の向上を目指しての研修はかかせません。また、1年に数回ある茨木市身体障害者福祉協会視覚部との交流会は、直接利用者の声が聞ける貴重な場です。

これからも視覚障害者の方々への理解を深め、もっと喜んでいただける活動を目指していきたいと思っています。

なお、対面朗読サービスは、眼鏡を忘れたなど読むことに困っている方にも対応させていただきます。毎週金曜日の午前と午後、中央図書館1階対面朗読室でお待ちしています。どうぞお気軽にノックしてください。

連絡先 グループ藍野 627-4129  
（茨木市立中央図書館内）

## 市民インタビュー



このにあいたくて



### 第25回

茨木市民の中からいきいき生活の達人を探し出し、紹介するコーナーです。話から見えてくるその豊かな人生に、きっとあなたも勇気づけられることでしょう。

サッカーの国際審判員  
まつお はじめ  
松尾 一さん

今年は、サッカーのW杯がドイツで開催されます。前回は日本と韓国で開催され、多くの人がサッカーの観戦を楽しむようになりました。松尾さんは、日本で10人いる国際審判員（主審）の中の一人です。ここまでの道のりや試合での心構えなど、興味深い話を聞きました。

サッカーは小さい時から好きだったのですか。

小学校低学年の頃は、父の影響もあって野球をやっていましたが、小学5年生になってサッカーを始めました。もともとスポーツは何でも好きだったので週末、土曜日はサッカーを、日曜日は野球をして過ごしました。中学校では、サッカーをやっている友達が多かったのでサッカー部に入り、高校、大学へと進学しても、そのままサッカーを続けました。

サッカーの審判員になろうと思ったきっかけは何ですか。

大学での練習の時に、手伝いで審判をやる機会がありました。また時間があれば、地元の少年サッカークラブへ顔を出し、子どもの試合で審判を務めたりしていました。その時審判のおもしろさを知ったように思います。資格を取るために講習会へも行きました。審判の資格を4・3・2級と取得していくうちに、審判員という立場でサッカーにかかわることができるんだということに気づきました。サッカーを通して出会った多くの人との交流やアドバイスも自信になりました。大阪で開催された「なみはや国体」も大きなきっかけでしたね。

国際審判員への過程を教えてください。

審判員になるためには、筆記、体力、実技などの審査があります。1級審判員になるには、1年をかけて審査されます。インスペクターと称する人が、試合での審判の様子を見て評価します。現在、1級審判員は全国で約130人が登録されています。国際審判員になるには、Jリーグなど国内の試合における態度や判定などを審査され、その評価をもとに、日本サッカー協会から国際サッカー連盟（FIFA）へ推薦されます。日本では現在、主審が10人、副審が10人です。1年ごとに入れ替えがあります。

試合中にはいろいろなことが起こりますが、どのようなことに気を付けていますか。

私は現在、Jリーグやアジアでの国際試合の審判をすることが多いのですが、試合中は刻々と場面が変化します。常にとっさの判断と選択能力が求められますから、日頃からいろいろな場面を想定し、イメージトレーニングをおきます。こうすることで気持ちをコントロールし、冷静なジャッジができるようになります。またビデオを見たり情報交換をしたりもしています。一つのジャッジに選手や観客などが反応しますから、いつも自分を客観的に見るように心掛けています。

サッカーを楽しく観戦する見方はありますか。

サッカーの試合は、テレビ観戦でも十分に楽しめますが、実際に会場に行って観戦すると、試合の雰囲気がいよいよ伝わってきます。選手の動きや声や、また観客の声援が試合の緊張感を肌で感じさせてくれます。今年はW杯がドイツで開催されます。試合だけでなく、いろいろな国の文化を知りたい機会ですね。

松尾さんにとって「生涯学習」とは何ですか。

審判活動での人との出会いは、いつも私に多くのことを学ばせてくれます。試合で全国を回り、その土地の良さも知りました。海外では、その国の言葉と文化を勉強することができました。こうした経験を通して、私は人との出会いが一番だと思っています。私にとって「生涯学習」とは、人との出会いの中でさまざまなことを学ぶということです。それがなければ今の自分はないのですから。

審判員は、技術、体力、精神力のどれが欠けても務まらないことを改めて知りました。サッカーの試合観戦では、選手だけでなく、審判員にも注目してみようと思いました。